相馬日記

下

和書門
類
三六四五三號
一二函
一四架
二冊

内閣文庫
和書
類
三六四五三號
二冊
三六七函
二〇架

内閣文庫		
番號	和 36453	
冊數	2（2）	
函號	267	140

Kodak Gray Scale
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
C Y M
© Kodak, 2007 TM: Kodak
colorchecker
x·rite
MSCCPFCC1214
MSCCPPPE1214
mm

国立公文書館
National Archives of Japan

日本政府圖書

相馬日記巻之三

東都　高田與清稿

常陸鹿嶋　北條時鄰注

廿四日。きのふ比雨あとなく晴たれば。三思のとぢ。頃行。傳四郎。などをともなひていづ。筒戸村の禅福寺といふにまうでゝ。洪鐘の銘をよむ。大日本国下總州相馬郡筒戸村。普門山禅福禅寺。万治三庚子天。七月

中歴第三。造佛歴。佛像寸法之條ニ。五尺者弘法傳ニ漢ノ時ノ人長也。近代謂之ヲ等身ト云。

白氏文集ニ。續古詩十首ニ。古墓何代ノ人ゾ。不知姓ト与名。化作路傍土ト。年々春草生ズト云。

初三日。住持當山中興開山大麟玄綱比丘尼銘焉。となり。本尊は平将門が渇仰せし等身の十一面観音の木像也。もと上総国の花岡といふ里よりうつしまゐらせたるなりといへり。等身の由来は二中歴にみえたり。寺のかたはらにいとふるき石卒都婆あり。ゑりたるもじすりきえてそのうぢと名とをしらず。寺僧は相馬氏の

神代紀下ニ。強御イムカフト云。

おくつきのしるしといふ。また玉山宗雪。慶長十六己二月今日とゑりし五輪あり。連歌師すゞのさくみまかれるかや。守谷野はいとひろき野にて目もはるかなるむさしのなり。これ相馬の偽都のかまへの内なり。そのかみつはものゝいむかひし跡なりといへり。くすし木村文伯どの所より出むかへて道しるべす。矢田部海道を経てゆけば

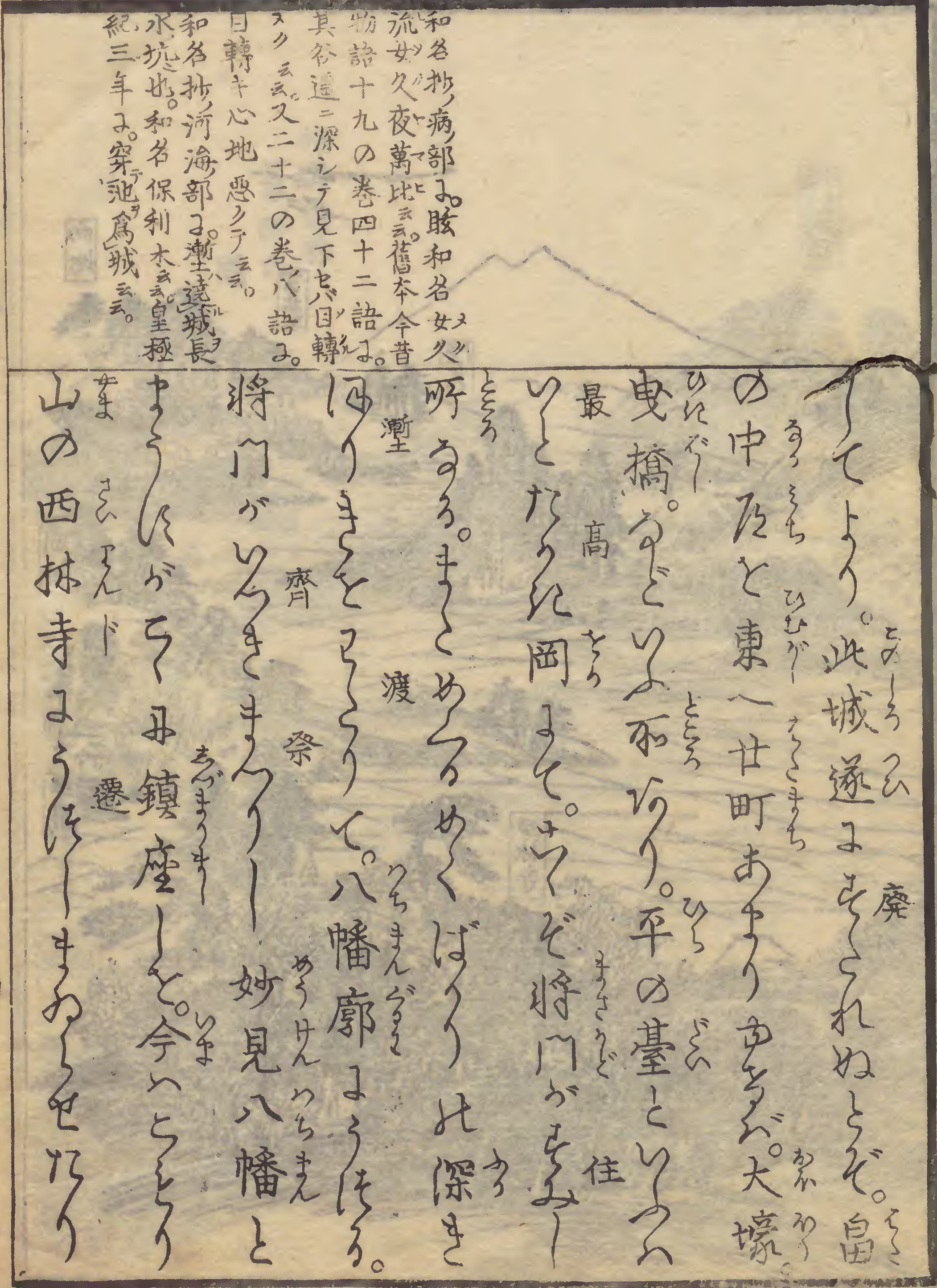
釋日本紀七ニ。備後国風土記ニ曰。疫隅国社。昔北海坐志武塔神。南海神之女子乎與波比ニ日暮。彼所ニ蘇民将来

守谷の里なり。徳怡山長龍寺の門に。浅野氏と木村氏といふ花押せしゆうき制札あり。また牛頭天王の社ありて。その御形は鏡に坐せり。裏に下總国守谷郷。牛頭天王守護所。大同元年丙戌九月廿一日。神主吉信。と鑄付てあり。牛頭天王とまうすは素盞嗚尊なるよし。備後風土記。祇園縁起。盆簋内傳。などに

二人在リ。兄蘇民将来甚貧窮。弟将来富饒屋倉一百在支。爰ニ武塔神借宿處。惜而不借。兄蘇民将来借奉ルト云。吾者速須佐雄能神也。後世ニ疫気在者。汝蘇民将来之子孫止云天。以茅輪著腰上詔云云。
神代紀上ニ。天邑君アマノムラギミ云云。

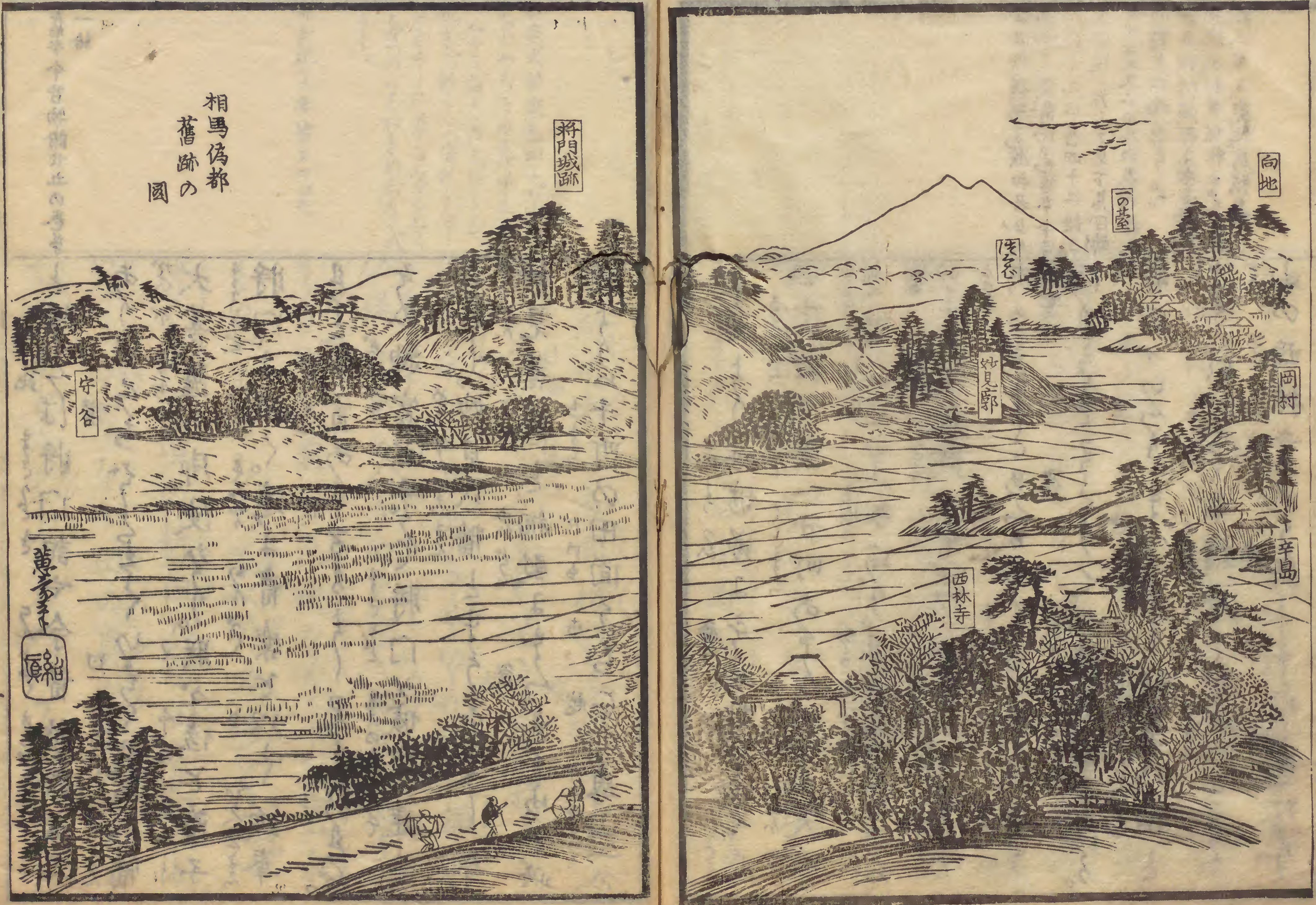
るなれど。蘇民将来や。巨旦将来がつたへあり。と天竺の故事にもとづくはつくり出せりとみゆ。文伯が家にゆくそのくひもとしはべく。しばしいこふ。三思のなごりさりがたけれどいとまとく。しつより野田の里ざいかたへわかれゆきぬ。むらぎみの齋藤徳左衛門が家をとぶらひしに。あるじよろこびて。俳諧師鳥醉がこの里に遊びしときしるせし記など

とり出くゑせられ。さらく徳左衛門文伯ら志るべして。相馬の偽都の舊趾とあまくわけいりに。まづ相馬小次郎師常が城跡ありて。今よりも壕升形すどのさま。むかしの名残あり。師常は千葉介常胤が三郎子にて。その裔あひつぎ。應仁年中までの城主となり。後元和といふ年のころ土岐氏の君をま〜られしが。上野国沼田城へうつら



和名抄ノ病部ニ。眩和名女久流女久夜萬比ト云云。舊本今昔物語十九の巻四十二語ニ。其谷道ニ深シテ見下セバ目眩ルト云云。又二十二の巻八語ニ。目眩キ心地悪クテト云云。和名抄ノ河海部ニ。塹ハ遶城長水坑也。和名保利木ト云云。皇極紀三年ニ。穿テ池ヲ為城ト云云。

してより。此城遂にをされぬとぞ。畠の中なと東へ廿町あまりわきに。大壕曳橋などいふ所なり。平の臺といふいとたかき岡まで。むかし将門がすみし所なる。まことめぐりめぐりは深きほりをとりまはして。八幡廓よりほる。将門がいつきまつりし妙見八幡とまうしゝがらに鎮座しと。今へとどうり山の西林寺よりうつしまつらせたり


相馬僞都舊跡の圖
将門城跡
守谷
向地
一の臺
妙見郭
岡村
幸島
西林寺

舊本今昔物語廿五の巻第一語

といふ。こは将門記や今昔物語に。人ありてくちばしりていはく。我は八幡大菩薩の御使なり。朕が位を蔭子将門に授く。速に音楽を以て迎奉るべし。託宣ありけるよし見えたるが。その神宮と号して将門が城中へ建させし。妙見八幡とまうすぞこれなり。妙見菩薩と相殿にまつれるなり。此所より八千町の田面うち越し。奥山。一の

和泉式部家集四に。ながむれどもとむるも霧の立ゐればへだてける月をだにみるぞ。続古今雑下に。俊頼。とへかしなきの葉にみだれてとぢのとざきめぐるかなとも。

神武紀に。要害ヌマ云云。

臺。向地。赤はね。岡村などいふ所々。めぢはるかにみわたされける。斎藤氏かたりけるは。いにしへは相馬の偽都のめぐりは。あまねく湖にて。またなき要害の地なりしを。寛永といふ年のころ。鬼奴川の流を南へ決て。数万頃の新田をひらきしより。いまはなほ田の真中に池のこりて。蓮などの生たるがおほかり。つら〳〵

相馬となづけせし名のよしを考ふるに。
所の醒淡海の中の一庭なるべき狭場と
よびなんを。音便にさうまとはうつし
いひなせし。かのさうが原といへるは
田中の離島にて。たてよこに上道一
里あまりの廣野之。むかし淡海の
めぐれる時ハ。えもいはねけしきの島
なりけんとぞおもひやらる。今此野
中を行径をかうしう海径とよべき

そもそもかうしうといふ名何ともしれ
得がたけれど。よくおもへば。将門記今昔
物語などに辛嶋とみえしと。かう
しうとそよとなまれるにて。辛嶋
の廣江といへるも。此めぐりの田となるを
ましをさせし之。辛嶋と名づけし
よしハ。やまとのことのとものかたりなん。
けしきのいとおもしろく。唐國の
島ともいひつべきさまなるぞかや。

また大和国の軽嶋とかいひてきこ
ゆれば。そもと知るべくもあらんもありがたく
し。古事談には嶋廣山とかいへり。さま
もしかれ嶋山ともいふべきことぞ。
岡村の林兵衛。和田村の由右衛門等。
あのほとりにまちむかへたりけり。道
しるべせさせつ。岡村の真王山延命
寺にまうりつ。門のうしろの林中のおほき
なる。樅の木の下に墳ありて。ちひさき

和泉式部家集二に。鹿乃ゐし
ころもへんくちつむこの
とらむけりでもとこの人
りまくらん。

石の小祠あり。かたはらにこのはのつもるに
うづもれて。五輪のかけのこりたるが
あり。四十年ばかり本尊地蔵薩埵の
開帳せし時。此墳の中より瓶ひとつ
堀出せりとぞ。其をり将門が七人武者の
塑像と。馬のかたちといふものと。開帳
まうでの諸人にみせたりしが。七人
武者の土形をば瓶とともにふたたび
さくにうづみぬ。二の馬は土像をば駒墳に

垂仁紀三十二年に。皇后日葉酢媛命薨。臨葬有日焉。天皇詔群卿曰。従死之道前知不可。今此行之葬奈何。於是野見宿祢進曰。夫君王陵墓埋立生人。是不良也。豈得伝後葉乎。願今将議便事而奏之。則遣使者喚上出雲国之土部壹佰人。自領土部

うづめぬといへり。駒墳ハ寺の南のかたに
あり。此土形どもハ布施の弁天のみあら
かま年ひさしくつたへきたりしをもとめ
かく。将門が時これらの物のやうに
いひなせしなるべしとぞ。按ずるにいにしへ
の葬送具にて。土師宿祢がつくり出て
殉死人にかへしものゝ類なるべし。寺のわ
の方なる子飼川のうづきをせきとめ
し太郎堰といふ大堰あり。洲崎のあらく

等取埴以造作人馬及種々物形。献于天皇曰。自今以此土物更易生人。樹於陵墓為後葉之法則。於是天皇大喜之。詔野見宿祢曰。汝之便議寔洽朕心。則其土物始立于日葉酢媛命之墓。仍号是土物謂埴輪。亦名立物也。云々。神功紀歌に。阿邏々摩莵磨邏珥云々。万葉一歌に。藪打好良羅松原など云
源氏物語夕顔に。紅葉なとくはしくかゝと。多くよまれたりなどありけるとぞ云。更級日記に。まつさとといふ所の山家にゝうきたらん屏風をたてならべたらんやうなりと云

松原に辨天の御廉香ありて。そのけしき
繪に書たらんやうなり。このところ
ある所に。常陸國筑波郡足高といへる
里の山と堀ならべ。土饅頭といふもの多
うりとて。余におくる人ありき。そは
おほきなるちひさなるかはらけのさまに
して。花に似たるあやあり。から國にて海燕と
いふ貝にこそ似るべし。本朝里人説なり。
周防國吉敷郡高原氷上山の土中

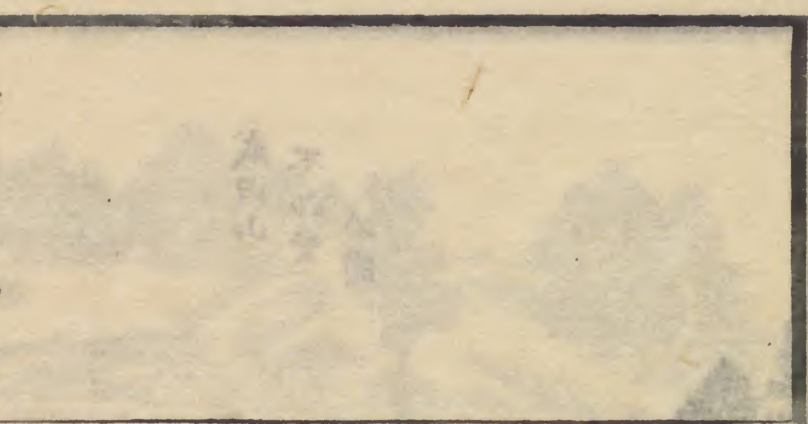
よりも。土饅頭といふものゝいでといへり。
されどかたちハ今のとハおなじからじ。
佛嶌といふハ堀をめぐらしてかまへし
所に。草木しげりくらがりて。おそろし
き古墳なり。中にとばかり艸おひね
所なると。つよくふめバ。地にひゞきあり
てきこゆ。これやかの兵器などあまた
うづみしがゆゑに。その妖気によりて。
草も木もおひ出ぬなるべし。里人ことを

将門が墳なりといへり。佛嶌と名づけ
しは。このところに地蔵の石像。又ハ何くれ
の佛の石像たてゝあるべく。坂をのぼりて
高き岡に大日堂あり。ふるき松など
おほかく。ながめよろしき所なり。将門
がうちじに跡なりといふ。つら〳〵此
堂のさまをみるに。古墳のうへに建る
なり。これ将門が骸を埋けん所ならく。
かの佛嶋ハ伴類の屍をうづめしや。兵具

すゞ埋たるなるべし。此処井の桔梗が
原といふ。将門が妾桔梗の御前と
いふが殺されたる所よそその墳なり。
今も桔梗はありながら花咲こと絶
へ。この御前がうらみによるなりと
いへり。海禅院といふもほどちかし。
それは将門が高野山のさまをうつし
て。先祖の墓をつくりし所也。此寺の
新皇宮といふは。将門が霊をまつる

て。国王明神とたゝへてまつり。山の
擁護山西林寺へふるくは茶畠山
清浄光院といへりとぞ。八幡廊より
移しすゑまゐらせたる妙見八幡の
宮あり。その寺あるじ鶴老師は。何
くれのみやびをよせあつめて。東都
のきこえある人にも交を結ばれし人なり。
余が。とぶらへるをよろこびて。そうと
たちまち茶を煎させなどして。おそなへ

つゝさまりとまかくし。年ひさしく
ひめつたへとさありとそひらき奉られ
し。大御神の御かけの掛繪あつけえ
奉りしも。拙がいんゑんのちなみすくなびせ。
たふとくも。かしこくも。涙とゞめがたき
までにぞ拙もおぼゆる。順行。傳四郎。
文伯などぞその外ともなふ人々も。
たふときのあまりにおゑを出しく
なかざるへなし」今宵は文伯が家に



やどる。鶴光師斎藤氏相ぐしく拙もし
たもとべ。よもすがら宇治大納言物語の
かうぜちして。人々丑の四つといふところ
いねぬ」あすはめぐりえし相馬の偽
都のさまを拙りつゝ。上に四里ばかり
がかどよそ。湖の中嶌なれば。上もうすれ
要害の地なれど。おほやけにそむき
奉りしが。わづか九年ばかりにむなしく
うのどあとぐくほろびたれ」此将門が

成田山不動堂の図
蕙斎写
紹真

相と今の世にかぞへまじくむくろさまき
ものとれさまりたるげくめれど。吾友行智
優婆塞が。秩父の圓通寺にてみし
将門が木像は。いと柔和の相なりき
といへり。これは像にさるべきことゆゑ。
いかなる腹黒のものにもあれ。いはまし
の兵士等にたふとみかしこまれ。
朝廷をかたぶけ奉らんとしも企し
ものとなれば。さまでの悪相なるべき
ことわりなし。すべて大悪人はかならず
柔和の相ありて。諸人に帰伏さるゝもの
なり。我見しさまより打ちかはまほしく
おぼえまほしげなりけれ。たれかそれとよん
るものはあるべき」。蚤人松屋子相馬の
墟をとふてよめる歌。
かゝまくも。かしこし。久しきの
天津日嗣の。御位を。ぬすまくほり
し。鶏鳴。あづまの國に。利生の。都

崇神紀歌に。農殊末句志羅珥比賣那素寐殊望云云。

神武紀に。魁帥此云比登誤(ヒトゴ)迺伽彌(ノカミ)云云。

神武紀に。督將イクサノキミ云云。まこと良將イクサノキミ云云。崇神紀に。將軍イクサノキミ云云。雄略紀に。行軍之師イクサノキミ云云。まこと大將オホイクサノキミ云云。崇神紀に。裨將タステノイクサノキミ云云。

なれ(如き)嫌と。いかめしき(嚴)。造りかまへ(構)く。ほど近き(間近)。国の司を。おひしぞき(追退)。あた(殘賊)つくる(強暴)。討平げく。ちはやぶる神と人(皆)これの。かびえ(慴慄)まつろ(順)ひし。ひとごのかみ(魁帥)を。すめらぎ(天皇)の。みことのまにく(命隨)。官軍を率おもと(從)。いさみたる(勇在)。いくさのきみ(大將)がはなつ(放)。矢に。かしら(頭)射させく。たまの緒の命。まに(隨)。死ありたるへくる。うから(親族)やからと。

天武紀に。副將スケイクサノキミ云云。新續古今序に。えびすをたひらぐるいくさのきみのつかさ云云。

和名抄燈火部に。燐火和名於迩比(オニビ)。

和名抄鬼魅部に。邪鬼和名安之岐毛乃(アシキモノ)。

和名抄鬼魅部に。魑魅和名須太萬(スダマ)。

和名抄毛群部に。玃漢語抄云夜萬古(ヤマコ)。

旧本今昔物語十四の巻四十二語に。頭ノ毛太リテ物不思エ云云。廿四の巻。廿七の巻。などにもあまたみゆ。

沫雪(あわゆき)のけぬるがごとく(如)。つくる(盡)ほろび(滅)うせ(失)ぬれ。その(其)あと(跡)と荒るる山に。雨(あめ)の夜(よ)は。おにび(燐火)もえいで(燃出)。あしきもの(邪鬼)。すだま(魑魅)のなき(哭)。もろ(諸)ごゑ(聲)に。狼(おほかみ)さけび(叫)。やまこ(玃)の。まどひ(騒)すると。里人(さとびと)の。かたる(語)をきけ(聞)ば。ねぞたち(立)ぬれ。黒髪(くろかみ)ふとり(太)。村肝(むらぎも)のこころを消(きえ)く。いと(最)も恐し。

亂歌(みだれうた)。

たつ(立)浪(なみ)の風にあと(跡)荒さん辛嶋(からしま)の

土佐日記に。てけのことゞち。とあるなにまかせつ云云。又てけのことにつけていへる云云。

廣江はあせく。おともきこえず。廿六日。あさも天氣よし。文伯。傳四郎。かどまでおくれど。わかれて馬を米田ざかすゝむ。抹兵衛由右衛門なる坂東ろ廿里ばかりおくりきつ。酒造村にて水戸路を横さまに渡く。用水に沿てくだる。馬にのりかえかりなる山は。相馬郡小文間の第六天山といふ。こはむかしぬすびとの

後撰雑三に。貫之。浪にのみぬれつるものとふく風のたよりうれしきあまの釣舟。

あまたさふらひ居て。往来の人を引ちぎなどせしに。今はあやしきあんりんめぐみによりて。さはることひとをなしとぞいへり。夜にいりて遠こちね問あきぬ。吾友澤近嶺が家をとぶらひて夜とかたりしかど。いそぐたびなるまゝさそひまね。近嶺はくちおもしろき歌人にて。せうそこのたびごとにたよりうれしくまちどほなるを。とりで

漢書張敞傳ニ。天下莫不拭目傾耳觀化聽風云々後漢書蔡茂傳ニ。天下拭目云々宋史司馬光傳ニ。天下拭目。天下之民引領拭目以觀新政云々。

和名抄国郡部ニ。下總国相馬郡布佐云々。

しもゐねる人物のうちにはあらざる之。彼きくならばうらむべし。我もいとうらやまし」戸田井の邊にて文伯が拙劣の人を馬もかへしけり。舟のまうけまで。この給く文伯が拙きをせしかど。平に布佐の津にさそね。布川の里は東ぬ此岸にあり此のごろ順行傳四郎。文伯。などがまめしきあるじまうけのもてなし。詞にも筆にもつくしがたし」。戸田井は

松屋叢話一ニ。享保十三年下總国手賀沼と決て。新田とひらかんとせしときに。沼深くして堤築とかゝれざりけり。あるよ友清撰にあづかりて。さらにおもひはからひしけん。とりわけ黄金へいかまうまうり。京江戸の宅地家財器用にいたるまでとぶらに賣

小文間の内なれど。堤をへだてゝ子飼川の河邊にすむ田居なれば外田居といへるにや。子飼川と刀祢河とのおち合にて。此所をせきとめられんみぎ。相馬はむかし淡海の中嶋ともなりぬべきありさま也」。享保十三年といふとし。吾ともがらの友清の翁いさゝかなる事をおこし。千万金をすてゝ堤を築おもしがゆゑに。二万石

はらして費をいとはず。遂にその功を終しかば。二万石ばかりの新田ぞひらきけれ
あける云云。

あまりの新田ひらきしといふ相馬郡
の手賀沼も。とをからぬ所にあり。その
堤を今も高田堤とよびとなん。
はきなせし手賀沼堤つむとも
いさをたかしこれ名にのこりし。印旛郡
竹袋などいふ里をすぐし。埴生郡の安
食川とこゝろ。この河は印旛沼のながれ
まじ。安食の里より左と右によりく。
印旛沼のかたはらをゆく。道興准后の

廻国雑記に。九月廿八日稲穂の別当が坊にて。湖水をながめてと云云。
神宗歌閑野に。天在此婆里与利来也雲雀止美草毛知天云云。淡嚢沙菜抄に。冨草ハ稲を云之云云。蔵玉集に。冨草稲云云。あそよりハ。ならの小田に稲ありそ冨草乃さるゝまをつくんかも。時鄰按に。稲を冨草といふハ天智紀三年に。淡海国坂田郡人。小竹田史身之猪槽水中ニ忽然稲生。身取而収。日々致冨云云。此よりおこれるなるべし。相模家集に。糸前のよみ菜は花つきそはさゝえとひらくすとぞなるべき。とよめるもこれにしてや。

いなばの海とこの辺をかまへし。今は
なぎさハ田とうまるが所多かり。
むべしきそいなばの海と名付せられ
田とする岸にみちたるとみ草。松崎村
といふ所よりつゞらをのぼる。
約も行なんづみ。盤のうへ平なるところにして
最いとむかし。此近き海ともなる天竺山
龍角寺に龍神の社あり。月どの朔日
十五日廿八日まで。いなばの海は真中

源氏若紫に。此ほどらうたきのしもに云。枕草子春曙抄八にちらくてとかたりのへらまのでらうたしと云。新撰六帖四に青ほどらうたきておもげきのへとありけるおかれらぞ約もなんらむらうたうへつらおもひとぞべきよし。本間氏が説あり。

なる百丈穴といふより。龍蛇飛あがりし。此社の御前にかゝれるとぞ」又大なる洞穴三ありて。中に石だゝみをしきまうけ。むかし人のすみけん跡とかやしき。かくれ座頭といふ妖怪すみしとなん」。其洞穴の上に。國内第一の大なる松樹の。根はむらがりて七本にわかれたちさしおほひたりとぞ」。ゆきゆきて谷にくだれば。千抱が池とて水おほく

神代紀下に。阿磨佐箇屢避奈莵謎迺以和多邏素西渡云云。

もなまさがあり。女とかはる所に松一本たてり。むかしあるひなめが。この池のあさどに一日に千抱の苗をうゑんとかせだちけるに。つかれこうじてしにけると。埋しるしの松なりく。千抱が池といふも。それよりおへる名なりといへり」。郷部村に埴生大明神の社あり。鳥居に當國三宮といふ額をかく。此神名帳にはみえぬ神なり」。やうやく

倭漢三才圖會六十六に。不動明王在佐倉成田村。毎正月六月二十八日貴賤群集云。

日もかたぶきかゝれバ。いそぎゆかんとせしかど。
て。はしうちをせんとおもへど。
いかゞなる坂なれバいかにせん。
あゆみのあゆみもはかどらず。とかくして
成田の里の不動尊の御あらかにまうで
つく。むかしよりはやうかはり。
となりて。いらかをつらね。堂塔乃
装厳たぐひなく。見ごとのありさまなり。
別當を成田山新勝寺といふ。真言宗

色葉字類抄太の部に。高雄寺元者号神願寺其後弘法大師改神護寺。當寺者應神天皇御願寺云此外山城名勝志九の巻に。諸書を引てくはしくいへり。

の大寺なり。縁起のおもむきをよむに。
此不動尊の本像は。弘法大師刻奉
りして。高雄の神護寺の護摩堂に
年久しくざせしめたまひしを。平将門
が謀叛の時。勅を奉りて。おほくの
のげんざたち。賊徒降伏のいのりを
せられしに。廣澤の寛朝僧正は。
此尊像を請じ。難波津より南海
を舟にて送りまいらせ。此里に

をゑ奉りく。丹誅をうけられける。
が。その後有て。将門遂に貞盛秀郷
がために首を獲られぬ。また下総國
生實郷の大巌寺の開廻及誓上人
が奇瑞を蒙られし事など。その外
の霊験いちじるきためし挙てかぞふ
べからず」。そもそも坂東に不動明王の
古霊場三所あり。相模國大住郡の
大山寺と。武藏國多摩郡の高旗寺

吾妻鏡三に。相模国大山寺。免田五町。畠八町云云。此外多くあり。
鎌倉大草紙下に。上杉衆二千余騎にて上州と打立て。享徳四年正月廿一日。武州府中分倍河原へ寄来る。成氏五百余騎にて馳出。短兵急にうちかゝりしに火出るほど攻戦ける間。上杉方乃先手の大将右馬助入道憲顕深手負て引しりぞく。高旗寺にて自害をとぐ云云。不動尊木像髭鬘の記文に。武州多西郡徳常郷内一院不動堂修複事云云。建武二年乙亥八月四日。夜大風俄起。大木抜根抜。仍當寺忽頽倒。本尊諸尊皆以令破損。然間曆應二年己卯檀那平助綱。云云大中

と云の新勝寺となり」。大山寺は
吾妻鏡に出づ。世人のよく知る
所」。高幡寺は鎌倉大草子にみえ。
また寺に傳はる文永十年の
金鼓の銘。康永元年に修理しける
らせし髭鬘の記文。應永廿年の
勧進状。などに委由縁をしるして。
鎌倉公方家の崇敬あつかりし
し御佛なり」。今三所の中にしよ

臣氏女名專合力。勵大功。仍重奉修造本堂一宇并二童子尊躰云々。康永元年壬午六月廿八日修復功畢云々。私案抄ニ。武州多西郡得恒郷常住金剛寺不動堂云々。抑當寺武藏野貽焉之坤儀。比于富士山聳峯之天象。有一霊峯。号高幡山。今常住金剛寺是也云々。此𣘺若者。乃大宝以前之草創。年号不次之勝躅也云々。此尊奇特雖有其數。先流汗事。近代現證者岩殿山御合戰。河越没落。小山御對治若犬滅亡。奥州御發向毎度流汗云々。爾間勝光院殿依御夢感。割菜邑所有御寄附也云々。
栄花鶴の林にかとけといきもみとそまうりつ云々。
継體紀。歌に。矢自矩矢盧于魔伊祢矢度你云々。万葉十二

なう叅詣人ありけん。あの桑田は
昊場なり」。今日をもどこのちうぐ
だんじきおこりなどいふ。ありそろ
しれ行とはしらぬくいのまり奉る
筆さんもそくなこのぶん」。ふとそく
御前の町家にかどりしに。隣に
あつまれるをとこ女ども。さうどが
しうそのいひうちさるがひく。うま
いねんとせさせし。夜追の馬の鈴の

に人のねる味寐ねびてもし
さかし君がめをそうかりつ
なげく。
和名抄人倫部に。機人和名久知止利云々。
辨内侍日記上に。夜いかり
ねかぢうしのとびのかどふ
とくりせまうと云々。辨内侍
うくしのよ後やまたなま
しきよるのうしのとび
ともさしてあそびん云々。

音みゝ近聞かとゆ。ちかくきこえ。ちらちらりんらん
うしのとひぞすぎいひをそへ。いとう
ふかくねるなるべし」。

相馬日記巻之三終

乳母草子に。あまりあさいねひさしきも。きく人いとあさましきものぞかし。よろづにわびしからでひるまで寝てあるは。ひとわろきさまにぞあり。云云。

相馬日記巻之四

東都　高田與清稿

常陸鹿嶋　北條時鄰註

廿七日。きのふのつかれにあさいせられん。女どもが浩ひるなりて。てうづめせよなどいふところには日さしいりて紙障子にとほる。あかりそめしまで日さしいりぬ」。あすを出て印幡郡伊篠。上岩橋。などいふ

古今著聞集廿に。或田舎人京上して侍りけるが。帰るとてひさごぼうりして居たりけるとぞ云云。堀川百首に。桐坂は笑路に小ふや杉の田の植坂のとほをつむくとひく。師説につむくはおとひためづるをさかまりけり。けむど風も廻れる風とぞ云。たゞけど風とあいふるえの乃つむじも廻りくるえなり。糸とけむぐるもめぐらしてとのされどぞ云云。論語述而篇に。曲肱而枕之。樂亦在其中矣。

所を過ぐ。片岡しみたるところの卜屋の
ひさごぼうりに。あやしの女がはむくしゃく
と糸引と。男はひぢまくらしたる
まもらくをとるは。たのしみその中に
あこなるべし。中川村にむすぎのめが
せんうは茶屋あり。このこなたは柴
垣にて。あの上にさえはへるなど
たるゆふがほの。枯葉の間より実は
まがりえさるを。俗にはひしゃく

ひさごのひさごの説。師の更級日記注に。渋柿のひさごの雄と引て。直に柄のほそきたるをしかいひくらしれたり。

ふくべとよびて。更科日記にひさごの
のさとごと書るをのぞり。神楽歌
に鶏は鳴ともあそびまうとひ
たまへ。いよしくないとめてきこえぜし
ふや。あはれこゝろをしいるはの海
右の方に離りて見え。あづらく色
て。ちまたにいそな村の二王尾とい
ふはじぞうはたてり。太田南畝のきょ
が銘ありて。かくなる北川真頼

神武紀に。捷遑(シバマヒ)云云。垂仁紀に。進退(シバマヒ)云云。源氏末摘花にいくそたび君がしゞまにまけぬらん物ないひそといはぬ頼に。

のちがこざこと歌をよみけりと侍き。とほ
きまがりたらねどもしなれば。むかしむかし
とおもひしに。されど今日千葉まで
行はらせたらんをおぼつかなしと
いちどりがいふに。ひたすらいそぎければ
まやどらね。酒々井の驛より左をたどり
そりて。山際の里に入る。むかひより上總
國の五井の里のかうしたち二人ともなひ
きたりね。弥門。馬渡などいふ所をすぐ。

万葉廿に。知波乃奴乃古乃弖加之波能保々麻例等阿夜爾加奈之美於枳弖他加枳奴。日本紀竟宴歌に。三善清行。保登計須羅微迦斗加志胡斯部能陀弊能那微迦幾和計傳互麻努流毋迦表新撰万葉下に。白妙之浪路別手哉春者来留風立色丹花裳折藝里古今雜上に。そこらみのくしにとほ白きの浪よりそよるあらじしま山。土左日記に。まろこの浪路をとほく行のふそれに似べきみかたはなぞかしに。年中行事秘抄に。高橋氏文

千葉郡の荒野にいづ。此野は摂に
坂東廿里ばかり。縦はかぎりしられ
ねひろ野なり。今はさかりのかしはなど
いろもえたれ。たゞ尾花は色あせ。しろ
たへの浪とまがふまでたれば。昔をしのぶ葛飾
野といひけり。此野は西の方のはづれ
すゝし。貝塚村を過ぐ。千葉の里に
いる。知東山来迎寺に。千葉氏の五輪
七基あり。土に埋もれたるを。ほり

云。天皇五十三年八月。行幸伊勢。轉入東国。冬十月。到上總国。安房浮嶋宮。尓時磐鹿六雁命從駕仕奉矣。天皇葛飾野令御猟。六雁留守。大后詔。此浦聞異鳥音。其鳴賀我久。云欲見其形。即磐鹿六雁命乘舩到于鳥許。鳥驚飛於他浦。猶雖追行。遂不得捕。於是磐鹿六雁命詛曰。汝鳥恋其音欲見貌。飛遷他浦。不見其形。自今以後。不得登陸。還時領舳魚多追來。六雁以角弭弓當遊魚之中。即著弭而出。忽獲數隻。仍号頑魚。此今諺曰堅魚云々。くはしきことは上に此文を引て。堅魚へかたうをの義なりといふ説あるかたしふかく。堅き魚のむらして。堅魚とはなれる名といへる説へかなへりとおもふ。時鄉按ずるに。此年中行事秘抄

さぐりもとめて。平氏亂語阿弥。應永卅二。二月十五。吉原見阿。應永卅二。二月十五。圓勝禅尼。永亨三。月十二日。なすといふもじとえ出たり。なれふかく埋もれし所へよむよしなし」。北斗山妙見寺ゟ。千葉氏が代々渇仰せし妙見菩薩たゝせ給ふ。もとは上野國の花園といふ所よりうつしまいらせし御佛なりといへり」。阿毘留山大日

の文。景行紀五十三年の条と神へし。賀我久へ景行紀に覺賀鳥とあり。旁訓にカクガドリとも。ミサゴともあり。師説に。カヾドリとよむべし。その鳴音のかゞときこゆるによりて名とす。といはれたり。

三社託宣の事。揀梁集にみえたり。

顕注密勘春下に。漢家摺本の形木云々。又御府のうさ

寺へ。鎌倉大草紙にもみえし古寺也。千葉氏のおくつき所にて。五輪十あまり九基なみたてり。その寺もいとふるく傳はりし物もおほかりしを。さだまれる住持なくてまもることあたはねば。ことごとく千葉寺にもて行て秘おかれけりとなん。今はわづかに千葉定胤がかきてのこせし三社託宣此寺の本のまゝぞ残れり。宗胤寺は千葉介宗胤がもとゐを開

木云云。吾妻鏡卅五ニ。被摺写法華経百部。此形木即所被彫彼震筆也云云。新撰字鏡ニ。摸摹字規也。形也。掩也。取象也。加太木。和名抄裁縫具部ニ。唐韻云。模法也形也。俗語ニ加太岐云云。吴異記中ニ楷模ハ加多岐云云とあり。

きし寺なく。宗鑑がはかくちきの石そとはなり。洪鐘に。金剛山東禅寺鐘銘并序。千葉寺之北。八幡宮之南。有新蘭若。長老圓中規公。嘉暦二年始開云云。元徳三年辛未。仲秋廿三日。とあり」千葉氏が住し墟此跡は。猪鼻山とて高うそびえ。安房上総の山とも。海のあなたにうかぶなり。まえうたる所之。猪鼻といへる池

神名帳上ニ。遠江国濱名郡猪鼻湖神社云云。兵部式ニ。遠江国猪鼻驛云云。更級日記ニ。ゐのはなといふさかの。えもいはずわびしきをのぼりぬと云云。

なみの上に崎のさし出たるが由名乃名なりや。遠江の猪鼻もさる所ときこゆ。猪は水の豬なるさま。鼻はものゝさし出し端にいふ詞なるを。猪の鼻頭に似たるからの名とおもへるは人ぐ。此里もいにしへは池田のごとく。大きなる池ありし事は。坂東観音霊場記に見えたり」松のむら立のえいちねかなに。あまてらすおほん神乃

がけハ土のかけ崩れしよりいふ
詞なるべし。崖がけなどかけの
地名おほし。関東にてハママといふ
ハケともボケともいふよし。委
く師の十六夜日記残月抄二
また松屋筆記九にみえたり
坂東観音霊場記九に。下総
国葛飾郡千葉郷海上山観
音院名千葉寺云云。

万葉十四に。あしがらの乎氏毛許乃母爾さすわなのかな
るましづみころあれひもとく。

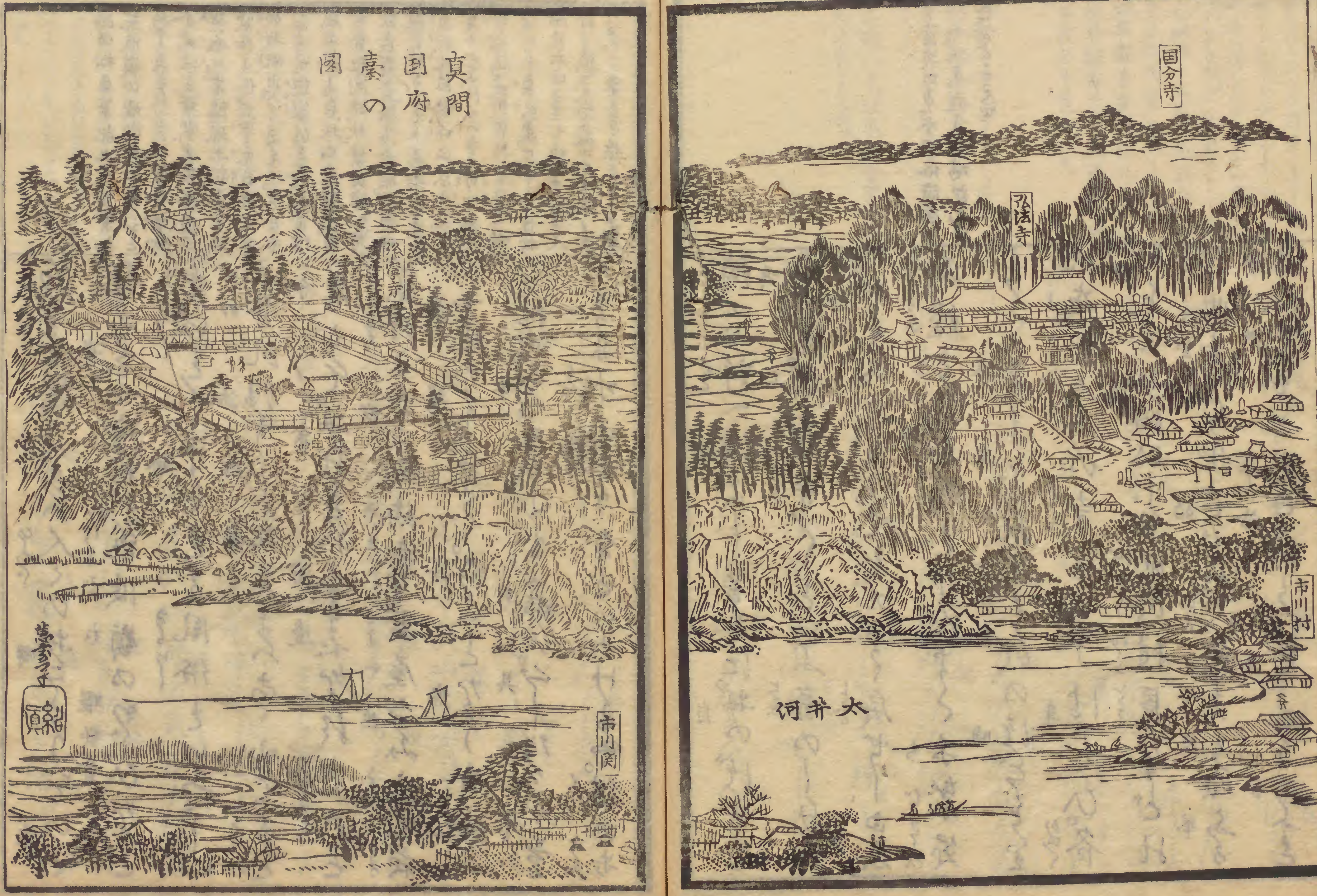
戻鐘の事。坂東観音霊場記
九の巻にみえたり。

石の小祠あり。むかしがけの下に。はにを
とりてひにたきし茶の出る所なん
ありける」千葉寺ハむかし名を海上山
観音院といふ。さまざまのふるき物あり
ときけど。山のふもとの麓なる所。
日ハくれかゝりたれバ。再びおもひたちてこそ
とゞめぬ。そこにもどる鐘とて
弘長元年十二月廿二日と銘せし物
がねあり。中ごろ鋳改さんとて。江戸の

鋳工が許へはこびけるに。おのづから
なりて。千葉寺へゆくといふ音のしけれ
バ。おそろしがりてそのまゝ戻せしとなん。
戻鐘といひつたへしとなん。また千葉笑
といふ。としどししはすのつごもりのほどにいたれバ
此夜。里人此寺によりつどひ。各
おもてをおほひして。地頭村長など此
ことまで邪曲事ありしぞ。人のよからぬ
ことどもをあげつらひののしりあふさ

千葉笑の事。本朝俗諺志四
の巻。坂東観音霊場記九の
巻。などにみえたり。

真間国府臺の図



師の松屋筆記五に。万葉九
筑波嶺の嬥歌會の歌にも
めとらへかぬつどひ加賀布嬥歌
ニ介云。注ニ。嬥歌ハ者東俗語ニ曰
賀我比。常陸風土記。まさに仙
覚抄に。俗ニ云宇太我岐。又云
加我毗也。すどつえて。男女ニ云
つまりて遊樂ほるとこ云。常陸
風土記に。自坂己東諸国。男
女春花開時。秋葉黄節。相携
飲食齎賚。騎歩登臨。遊樂栖
遲。とりすさもあるへし。さて
賀我比は嚇呼の意にて。万
葉十四にはゞくゞをに可加奈久
和之能云云。和名抄十八に。嚇
讀加々奈久云云。旧本今昔物
語廿六の第七語にむきサ人
計ノ猿云云。宝藏ニ向テカガメケ
バ云云。一ノ宝倉ノ猿カガメキ云云木

わりといへり。ある人この地とこそりといさ
むるさゝごとすれば。筑波嶺のかゞひなど
あへ。ひとくはさはる風俗といふべし」。
五井ぬほうしたちまへあへ小そらを
なるちて。地みえくるまゞなれ光戸と
いふ所に中ごる。海士が苫屋さすみ立て。我
のせどなみごさく。うまとなるむしよへの
ら㒵べ。ころろ小も寐ぐ。ぐしたる小堂
がよゑ水あつりるどいふけみや。彼の去

二走リ登テカガメキ合タリ。などと
あるかゞといふ語と同じく。聲
とゆげてさるさまを
いへるなり。景行紀に覓賀鳥
年中行事秘抄に賀我久など
あり。その鳴音の。かゞと聞え
しゆゑの名なるべし。万葉に
嬥歌とあるハ。韓詩外傳に。
嬥歌蛮人歌也。とみえしを
かりたるなり。
白氏文集三に。朝飡飢渇費
杯盤。夜宿腥臊汚耕席云云。十
六夜日記に。夜の宿どなま
ぐさしといひし人云云。
旧本今昔物語十九の第十
八語に。簗居テ鹿ヲ搔上テ。
操ノ水ヲ出スガ如クヒリ散ス。
其音極テ穢シ云云。
栄花ものがたりの。浮殺のまへ
きのまにまにれそ。ぼいの人の
いしようもむげにみぐるしきね
云云。

ふるまへくさましといへば。しをんといふ
あるり薬ぶくちし免しお。あぐく厠へ小抽り
く。さまざまの水をいだしやうなる抽と
きこえしが。ほどふるまゝに。たゞ
あひまましひれそぴちさゝやぎねと
いひはくねまえぐ。余とむ女そし」。廿八日。
ちほくてちうたのの舟のなかなれば。
みあく渡りまいと抽のひとましに。
昭へかゝけいみじう霧こゝらて。海の面

枕草子春曙抄八に。よくてちゐ(?)のものゝ名に云々。
史記始皇本紀に。徐市等云。詐曰。蓬莱薬可得。然常為大鮫魚所苦。故不得至云々。
奇異雑談集三に船ひのをく入る鮫といふて此邊の海にみそて人をとらうをさげしと云々。
齊明紀六年に。䱊其鮫鮑䰲彼創羅云々。
外記日記十三に。經光驚執兵杖自注に。俗号之奈木奈鮫云々。武藝考證。本朝武林原始なども諸書を引て所見をあぐ。こそぐりその方なし。東関紀行にもあり。
馬加城合戦の事。鎌倉大草紙下の巻にあり。

たゞならじ。大鮫魚入る鯨。などおそれ
おそれられし神は。かゝるときにぞひら
いで出んし。
さらに海のあたを追ひての風をこそ
とくなぎさにきり払ひなん。さり
ちとてもとゞめてもあらねば。
る備が馬小歩ませ行く。漆ばらひ
に黒砂。猶え。検見川。馬加。などいふ里
と過く。る加い古き城あとそのへ

吾妻鏡一に。武衛鷺沼御旅館云々。
三代實録七に。授下総国従五位下意富比神正五位下云々又十九に。授下総国正五位下意富比神正五位上云々。又廿五に。授下総国正五位上意富比神従四位下云々。神名帳上に。下総国葛餝郡意富比神社。

が陣をまじへし所と」。鷺沼は鎌倉の
二品のしばし陣所とせられし里なり。
むかしいさゝか大沼ありしが今は
かたちばかり残れるもみえて。此邊よりも
両隊出る風ぞはげしければ。のびしさ
いたみけるなり」。葛餝郡舟橋のほとり
に意富比神社あり。三代實録。延喜
式。などにみえたり。やうやくに従四位下
の階にすゝみし神なり。そもく

国花万葉記十に。正中山法華経寺。法華に中山に立。寺領五十二石。伏見院御宇日常上人開基と云。倭漢三才圖會に六十六の巻亦同。国花万葉記十に。法漸寺。天台。葛飾郡。寺領五十二石と云。倭漢三才圖會六十六の巻にも見ゆ。

神に位階を賜ふとぞ。そのきざみ〳〵にありて神田とよせられしとぞ。國々に神田といふ地名あるもこれ也」二子村の宝珠山勇闘寺。中山の正中山法華寺。鬼越村の八幡山法漸寺。などにまうづ。法華寺ハ鎌倉大草紙に。日祐上人中興せられしよし見えたり。開基は永仁年間の人にて。日高上人といひけりとぞ」一八幡の里にハ八幡宮ハ。馬手

寄附　階　詣

空華集十九に。下總州天平山安国寺化鐘疏云。故征夷大将軍源公執政之初暦應間。創於六十六州毎置一寺。皆名安国寺云云。梅松論下に。三條殿より六十六ヶ国に寺を一宇づゝ建立し。各安国寺と号く云云。等持院ハ尊氏郷の謚号也。

の方の林中に在り。物ふりたる宮居也。八幡宮ハ一宮。國分二寺。安國寺。などやうにいづこの國にもありといへり。安國寺ハ足利等持院殿の世に建られしなり。空華集や梅松論に志るしたれど。八幡のさだかなることはきこえねど。是は源家崇敬の神にておはしませば。鎌倉の二所。それ〴〵の守護職に物せらる。いつもひまはからせられしかるも

奥隠　記　齋祭

万葉十四ニ。安能於登世受由可牟古馬母我可都思加乃麻末乃都藝波思夜麻受可欲波牟。
万葉四ニ。まゝの浦の与騰乃継橋ト。神楽哥朝倉ニも。らきやうるるあちの継橋ト。
まゝといふことの考ハ。十六夜日記残月抄ニ委し。

あるじし山を出て真間のかたへ尋ね行く。名にふりたる継橋は。弘法寺乃門の小川に渡せる橋をいふ。按に。継橋は木竹にもあれ。舟筏にもあれ。継ぎ並べて造りし橋なるべし。かゝるさと小橋ばかりなるやはしくや。もとといふ土のむかしによりたる所なるんと思ひやるに。今の国府臺は太井川に臨たる図にて。水のむかしに厳る壇なれば里の

万葉三ニ。勝壮鹿乃真間之手兒名之奥槨乎此間登波聞杼云。又吾毛見都人尓毛将告勝壮鹿之間々能手兒名之奥津城處。此外いとおほかり。
続日本紀十四ニ。天平十三年三月乙巳詔曰云々。毎国僧寺ニ施封五十戸水田十町。尼寺ニ水田十町。僧寺必令有二十僧。其寺名為金光明四天王護国之寺。尼寺一十尼。其寺名為法華滅罪之寺。云々。又廿二ニ。太后仁慈志在救物。創建東

名にも負ひ。かの太井川に継渡せる橋なればつぎはしとはいふなるべし」。真間の手児名が墓はさき處へ。池は辺に手児女明神とて社あり」。石坂をのぼりて真間山弘法寺にまうづ。庭に青葉の楓といふがあり」。国分村の国分寺に。薬師如来の尊像たゝせます。こは聖武天皇の天平十三年といふとしの二月なりけり。諸国に建させたまひ

大寺及天下ノ国分寺者。本太后之所ニ勧也云云。

天文七年十月七日。小弓の御所義明朝臣。国府台にて。北條氏綱とたゝかひ討死し。又永禄七年正月八日。里見義弘らのところにて。北條氏康氏政と合戦敗北せしよし。所見あまたあれど。ここにはもらしつ。ことしげければあげず。

て。寺田もなかく寄らせたまへば。いと
きらくしき灵場なりけんに。今は衰
へてしありさまに」。国府台は此道にお
なるびなき高岡にて。二度軍を覆
せし所なれど。今は安国山總寧寺て
ふ大寺立て。法の音声はたえざれバ。討死
せし兵士などの怒の魂もなごみぬらんと
いとたふとし。今日も法師らは集ひ
て。木魚うち。鐘ならし。経よみあげたり

源氏若菜上にあかしの君ちかく
らうたげなれバ。あはれといとけなき
きこえさせ給ひけり云云。又花宴に女
房はうちあかりのすそ。ほどなきゆへ
のいくたびかこれかとあかれたち
あかしのとき。ことなくかやしけれ
とのおもむきとて云云。
村田春海翁の説に。唯ハ於ゝ
の仮字なるよし。古今催馬楽
と引ていはれたり。師説によりて
の詞のかな。アイウエオの通音にて
於ゝイラへといへる唯ヘ。をそラへハ
いけていふ詞也。應答の詞にア
ともイともウともエともオとも
いひ或ハ重てア、イ、ウ、エ、オ、
などもいふ。皆阿行の母音にて
あなたがたハ誤也。又万葉七に。宇
治川と舟よせ呼跡よぶとも。
といふを引て。乎の仮名に定むる
いふもあはぬ説也。此の呼ハ

時ものまうさんとおもふなど。
母といふだにませじ」。市川の渡ハ吾妻
鏡や仙覚が万葉庭訓に太井
川とあらし河く。俗にハ江戸川とよぶ。
吾黨小竹茂仲のとらふ説に。江戸
河といふハ舟人此詞よりあやまれる
名也。そは下総の境。冥府ちかくよりて。
此川筋を經て江戸へ通ふが故に。
舟人此をえどかハといふ。然れバこれをよびなすと。近頃

助辞の呼かけにて之の於をはぶきてま
らしといふなるべしとぞおもへる
どふかし。
吾妻鏡一に。太井要害云々。又
太井隅田両河云々。仙覚が万
葉抄五に。下総国葛飾郡の
中に大河ありふとゐと云々。
又十五にもみゆ。
詞林采葉抄三に。万葉集庭
訓ニ仙覚註置之ヲ云々。又當
集ノ庭訓云々。いづれも今の仙
覚抄をさせるなり。
為尹千首に。あぜとこし苗代
水のほどなくてそのぬかり
のかくるぞうき。
古今著聞集十一に。とんばう
がへりと云。體源抄一に。蜻蛉(トンボウ)がへ
りといふ云々。袖中抄三に。あきつ
つハ蜻(トボウ)之云々。又十七に。あきつハ
とばうと云虫なり。云々詞林
采葉抄三に。秋津トハ東方羽
之云々。時鄰按にとんばうハ臂

へたゞしき名ぞとおもふものもすくな
からんとぞいへり」舟とあがれば武蔵国の
葛西領也。市川北岸をとほるころハ雨も
やみぬ。田中のみちはぬかりたるをゆくに。
足のたちどさだかならず。とんばうがへり
せらるゝことたびくなりしかば。衣も泥に
まみれぬ。よそめいとみぐるしかるべし」。
逆堰の渡は東葛西と西葛西との境
なり。河の名を中川といふ。太井と隅田

含の咎なるべし。その神武紀に。
如蜻蛉之臂呫焉由是始有
秋津洲之号云々。この臂を
あかゞくてあきるハあきが臂と
含て輪にかくてとぶりのかた
ぞ。とんばうといひけるにや。
和泉式部集四に。あきひるを
てみなにおみひく人どものいと
かしげるをバ。おみどぶつと
いふもいとをくゆきねとや
たくとくくといふなかるらん。
師説に。たくとい云詞の重は
疊ヘ言故いたみかさねて

との中を流るればなるべし。網うち。釣
たれし人。舟にも岸にもあまたあれ
ど。しのびにあみだぶつといひはくなるに。
いとよくすくはれべくや」。たて川にそひて
ゆくに。本所の町屋軒をならべ。ちまた
行かふ男女のなりすがたよそほひかざれる
さまもあざやかにみゆ。此わたりゐなかなれど世
のさかひに。都のてぶりもまじり
ぬる。面色もかはりてみゆるといひたゝみ

濁るをいふとのみいへり。おの色よ
たをえしなどいふも。いくたびも
うくミたるよしとされバたとへハ
たくみの略なれバ必清くいふ
べき詞なりとぞおもひてよめるハ
誤之拾遺物名にあづまぢの
やしなひもる人の子ハちゝ
みなしもあはひなれ。

松屋叢話一に。村田平四郎平春海。字ハ士観。号と織錦齋といふ。賀茂縣主真淵の門人也云。墓所一覧に。文化八年二月十三日死。葬于深川本誓寺云云。按に年六十六。

万葉三にならまよしあるのミやこハさく花のにほふがごとくいまさかりなり。詞花春二にいにしへのならの都の八重ざくらけふ九重ににほひぬるかな。

ちてあんと。おもてなきさいふべくもなし。両國橋のひだりみぎりをみかへりたるに。まことに吾妻の都といひもしつべきところなり。にぎはしき世のたとへにいふべき所ならむとぞおぼゆる。ひとゝせの春。吾師織錦翁と共に隅田河にせうえうせしとき。さかりなる今ハ吾妻の都にすみぞ河原に八重ざくら花。とよみしときにおもひいでぬ。そもそも江戸といふ名のよしは荏處の略語なり。好荏乃生る地なればなるべし。されバ荏原郡に隷けるなり。國郡の境ハ世々にかはりもかはりなれバ。後豊島郡に隷するにや。荏原といふも荏の生列たる貌をいふ詞也。安藝國高田郡麻原郷あるとも思ひあはすべし。縣居翁の江の門の義といはれしハしひごと

後撰集にぞよめのさあまのこゆるぎ三笠山あるくいかで
まそ旅べき。後拾遺集にのかきに。此は草ま花とを
しそ。ゆけりぬなどつけさせて
給ひて云云。旧本今昔物語廿

ゆく。この邊。江の門とはいふべき
地形。いにしへはきこえず。今もある
ことなし。しかるを古学にこゝろよせし
人たち。大江の湊門とさへいふめる。
名を正さゞるみだりごとになん。この
ふみはくはしくかうがへは此のほか別にかい
きつけしたればはぶく」。拝撰する茂仲
のをぢが家をとぶらひしに。守のおきな
目のわらはゐらず。今日は茂仲ゐあはせ上

六の第十語に。二人ノ子ヲ船ニ守リ目ニ置ラ云云。
万葉八に。おきつしまさきにさくといふ
こゝろ花を指折りきかぞふ
とべなくくさのはな。
古今六帖二に。まつらの浦や
くとめぐるけりおふるのち
うくなりがられし。又あが
まつらのはまをさもあら
みへまうきやくと君をま
いはれ。大和物語上に。篠づ
くのうまやくとまちきびし
君へむなしくあそしよ
とる。神道集七に。羊太夫ト
申スは今ノ時ニ上野国多胡庄
ヲ立テ。都ヘ上ケルガ。未ノ時ノ
御物沙汰合テ。申ノ時ニ国ヘ
下付ケル云云。これも午ノ時と

おくらふ。我が出たつときせうそこ これ
つましに。
およびをりてうちやくと行めぐり
君かへりこん日をまつわれへ。と書く。
風のけにふされてえおくりまゐら
せねバくちをしくなん。といひおこせ
たりしが。今はいとゞちかゝるなるべし」。
かたときもゆるさず夕暮松の下庵にかへり
はまへつく。ほどなくほどにしつめぐる

今ノ時とりかへして書るなり。

のちうしゞへいりて打ならしすぐ。
上野本石町の鐘ハと忽ひゞきあひ
てきこえ也」

相馬日記巻之四終

昔ハ世の詞の道ふかくその比の人ハよくしりけれバ
ことひたる今のよの人ハよむにもことゝへと知られ
人々のにさとひよみかしこき中にものしけるひろ
なり據の日記なといふもの多ハそみなむかしの人の詞
あつかふに花やかなるまゝにさまざまいひそめしを
とりなく聞えて古はいふにそそれのことをする
ひとけたる世のことして其その人のいふ詞のとりし
ぞこまかにとりてやすらかにいとゝくして後の人

乃たつえうれしきことは硯へていろく梅ハよかひ無きものれさ
ふ實をはへ就へをし公卿の数乃こたるの梅なき宮か
たるまるさうねをふへハ今まへこ昔のふかたは及ひそしと
いつもやはそゑし昔此様の日記といふあるといふそといふ
更しれいを色乃をひくて見ても只孫左乃しれ
器数乃記職錦の松ええの様語記大達よ例まてハ衣えひ
様よ忘られたるまての為の所なしのおする日記なりけり
あかるまくの 文政元年五月本間游清 藤原常嘉書

書ありくれあし爲字ちは出とのこれ家
おさりしなくれいし所まて世ての年川のあとらしさ倫
人の情乃あまう深きをりさする家ら御母と去
のいさをありそり井ヰ見そしきつゝりしは記
ことは書こゝろに出ゐてまつをこの記よあむ何とも
けるされと数よ家紀あつまれもそてハ何かひ
記と母うかへの事は機の事や仰はろしも按深けり

多病ゝ河うしの刀自我さちしれのなき光
後鈴屋の鹿島紀行 あとめてたまゝ物ろう寛
ふるまゝれあるまてかけはつけは御作紀行乃
あまり紙以ゝのゝハ云む然ゝるに松の屋のあ翁しの
おほ日記といふをとろ小豆人のいひゝるゝとゝも
よ紀あし筆にまかせんと流さあむかし今此作
なもいと九りしうさつりかとせん去紀ゝしうき跋
坂さへくハ筆にかれしりさて其の日記のこゝろ覚ゝ
千よ絵川の水にも古黄一本紀よ多くへりとこゝを
葉ゝの底ならしてた必まゝ拾めひらきつまつ紀
水ところよは時数乃めし沈密ゝれ標注せ給ひ
当れもふ代なる松の生ゝの八雲たむ隠なと皆の
とのてふりまゝ傳秋の月比さやれこそへきつもれ
筆ならし加ゝ数亭主はし書ふこのいてゝ多くことし

四方の海しつかなる大御代にあひたてまつりて
まなひ遠くかよふ人すくなきの今にあたらしきものを
ふかくさくりもとめて計りにひとつにしるしてまつる
文政といふとしたまへるしるしのとしきさらきの日
平二年にしるす　藤原豊泰(?)

越智(?)信書

菊一本のむかしよりのことわいてしは次の
源信をしのまなひをもしらく下総ふさの国
おのれ相馬ふむかしの名をとおもひてさて其の
大きさしらるを得たりし其の名残にかひきある
菊をとひてあるの所に東人をたすね時移
くらふみ小林をのいくたひかたへく深うれ
けしふるるに以すへに文献にみおえくしるえ
歌にもかを立てるのことに常陸なる相乃尾をあす

乃さゝれし安麻呂ぬしか此ふる乃日記を見
侍るにそのおもむきかのみちをおもひおこして定也
侍るにかきそへられたる歌とものいとおほく浮葉の
はしにあまたの事とも見え鮮なる花の紅葉の
ちさきやうしろかなしくきゝ給ひあはれたるへきそのところ
乃名のゆゑよしともそへの此の人あまたして
歌に詞そへのせ侍れとれなるもまた其宝目
このやうはのちのつゝらのもとに書おくれ乃

日記のはしにしるし侍りあらむかし
月たちそめしおもひあかさのおくのおぼつか
なきに浮遊くおもひ出すまゝにしるせるぬく
あきらかに志るされる此松の尾なるあるは
乃ぞみしの日記に家の安里けむ
文化十五年卯月　大石千引

○松屋髙田先生著書

俳諧歌論	二冊	刻成
松屋叢話	二冊	同
筑紫舟物語旁註	二冊	同
楝溪集	一冊	同
擁書漫筆	五冊	同
國鎮記	一冊	刻成
賀茂真淵翁家傳	一冊	同
相馬日記	四冊	同
十六夜日記残月抄	五冊	同
武刕髙幡不動縁起	一冊	同

文政元年十月

江戸書肆

糀町平河町二丁目 角丸屋甚助

京橋銀座二丁目 伊勢屋忠右衛門

国立公文書館
National Archives of Japan